

## 須藤君のことづつて

ほそやまこと

ボクはあまり夢を見ない。見ても目覚めた瞬間にはもう忘れているたちだから、あの朝に限って妙にリアルで、鮮明で、脳裏にへばり付くような夢の記憶はとても奇妙な感じだった。

夢は長い時間ボクの眠りを占領していた。夢の中で何も語らなかった男、底知れぬ深い穴の底を覗きこむような目でボクを見つめていた男、無色で、おぼろげで、暗く輪郭の乏しいその表情からは何の感情も読み取れない。

まだ半分は眠りの中、眠りとも覚醒ともいえない薄ぼんやりとした意識の中で夢の中のあれが誰だったかを考えた。しかし、どうにも思い出せない。

やがて、夢と記憶の糸が繋がりはじめるところ、その名前は、もうとつくに消去されたはずの深い記憶の淵から甦るように浮かんできた。須藤、そう須藤だった。すっかり忘れていた。

“なぜ、突然今になって”

と思った。あいつとはもう何年も会っていないのだから。

\*

須藤とは高校が同級で仲が良かった。暗い目をしていて、ぶきつちよで、子供のころから剣道を習っていることにひどく幼ないプライドを持っていた。

自分を主張できるのは強いことしかないと思いついでいるふうで、いつもスティックに板に握りこぶしを打ちつけては拳を鍛え、自己流の喧嘩空手の威力を誇示した。生来の口下手と眼窩の落ち込んだ風貌は人に凶悪な印象を与え、あまり頭も良くないから教師への受けもすこぶる悪かった。

実際、当時の不良じみた子供たちやワルを気取った連中とは少し違って、追いつめると何をするかわからないようなところがあつたから友達もいなかった。だから、群れることもなかった。

その須藤がどういわけかボクとはウマが合った。あいつは、当時ビートルズのコピーバンドを組み、ギターが巧く、派手で、目立ちたがりやで、考えることといえば女の子の

ことばかりといったタイプのボクに妙に心を許した。

ボクの記憶では、二人は教室でも放課後も休みの日もよくつるんでいたように思う。他にも友達はいたが、気がつくといつもあいつがそばにいた。他の誰かが一緒にいた憶えがないからあいつといるときは二人だけのことが多かったように思う。

二人でいるときはあいつの暴力的で凶悪な印象は消え、小心で、臆病で、時にひどく繊細な面が顔をのぞかせた。父親を早くに亡くし、母一人子一人の貧しい家庭で育った生い立ちもあつてか、あいつは屈折していた。死んだ父親のことはほとんど話さなかったし、母親や家のことも話したがらなかった。

互いの家は電車で1時間以上も離れていて、ボクの家は山側、須藤の家は海の近くにあったから、夏、海に泳ぎに行くときはいつも須藤の家が海の家代わりになった。

死んだ父親が残したという猫の額ほどの店は母親が切り盛りしていた。店はテレビや洗濯機などの家電製品が何台か申し訳程度に置いてあるだけの小さな電気店で、表には須藤電気店の屋根看板が掛かり、その下に松下電器だったかなショナルだったか、埃まみれの古ぼけた看板が一枚下がっていた。

須藤の話では、仕事は近所の客の注文に応じて商品の取次ぎをしたり、商品を届けたり、メーカーや大型店で売れた商品を委託で配送したり、据え付けたり、という話だったが、小さな店には客が数の中から選べるほどの商品は置いていなかったように思うし、店に客が出入りする姿も見ることがない。

店の奥にある住宅は6畳くらいの畳部屋の向こうに小さな台所があつて、店に通じる土間を挟んだあたりに風呂とトイレがあつたように思う。6畳の部屋には家具がなかった。狭くて、殺風景で、何もない家だった。

今から思うと、地元の学校とはいえ、とても私立高校に行ける家庭環境ではなかったように思う。あの商売からそれなりの収入があつたようにも思えないから、多分、死んだ父親の生命保険か遺族年金のようなもので生計を立てていたのかもしれない。

息子の友達が訪ねてもほとんど口を開かず、いつも暗い表情をしていた母親の印象は薄い。寡黙な母親だった。あいつはそんな母親に対して暴君のように振る舞い、気に入らないことがあると怒鳴りつけた。

そんな息子の云うがまま、ただ黙って従う母親の様子は両親が絶対的存在という家庭環境に育ったボクの目にはかなり異様に映った。とはいえ、須藤とボクの関係は他人には立ち入りがない領域で成り立っていた。

ボクらはよく二人で学校をサボった。面白半分にタバコを吸い、小遣いに困ると万引きした。街中で他校のワルと鉢合せしたときは、相手がチビとみれば居丈高に凄み、自分たちよりもデカければ一目散に逃げた。学校の退け時には同じ市内の女子高生を待ち伏せてからかった。

高校2年の秋、ボクは校内でタバコを吸っているところを見つかって停学になった。父親には死ぬほど殴られた。丁度同じころ、須藤もあの年頃にはよくある暴力沙汰で停学になり、そんなことが何回か重なった挙句に留年した。

学年とクラスが変わるとボクらは顔を合わせなくなり、あいつは学校に来なくなった。すっかり厄介物となった須藤は、やがて、校外で起こした些細な暴力事件を口実に退学となった。ボクは須藤の存在を忘れた。

\*

卒業後、都内の有名私立大学に進学したボクは親元を離れ、下北沢に部屋を借りて一人住まいを始めた。

大学では音楽美学を専攻し、学生バンドを結成してベースを担当し、やがて、ヤマハのビックバンドにスカウトされてプロを目指した。ちよつとした冒険のつもりで参加した前衛的な演劇活動で知り合った女と同棲したのもその頃だった。

何かの都合で海沿いの町に行くことがあって、そのついでにあいつの家に立ち寄ったことがある。須藤とその母親は変わりなく暮らしていたが、ボクの目にはそれがただ変わればえのしない暮らしに映った。

親子は久しぶりに訪ねたボクを無条件に歓待したが、暗く寡黙な母親と、高校時代にタイムスリップしたような話しかできない須藤の田舎臭い幼さは都会の風に馴染んだボクを辟易させた。

大学ではゼミより芝居や演奏活動に血道をあげた。中学や高校時代の思い出は薄れ、自堕落な学生生活と、芝居と、演奏活動と、都会の夜の記憶がそれに取って代わった。

卒業には5年かかったが、結局、プロの演奏者にはなりきれず、同棲していた女とも別れた。今思うとそれが人生で最初のつまづきだったように思う。ボクは生き方を変えた。

\*

卒業後は親の経済的援助でフランスとアメリカに遊学した。帰国後は父親の事業を手伝うことになり、そのことがもともと乏しかった金銭感覚をもっと麻痺させた。

父親の会社では入社早々子会社のひとつを任された。何も知らない若者が社長と呼ばれ、年上の社員を顎で使い、イタリア製のスーツを着、黒の高級車を乗り回して自分は特別な存在なんだと思い込んだ。

そんな若者はやがて人並みに結婚し、子供ができると海の近くにメゾネットタイプのマンションを買った。何もかもが順調な人生に思えた。

10年ほど経ったころだったと思う。海岸通りを走っていると、対向車線を挟んだ向こう側の歩道に所在なく突っ立っている男がいる。見覚えのある顔だった。左側に車を寄せ、窓を開けて声をかけた。

須藤は突然目の前に現れた黒塗りの高級車に格別驚いた風もなく近寄ると、

「あつ、ほずみ……」

と云った。

久しぶりに会った須藤の存在感は薄く、その表情は何か魂の抜けたもののように覇気がなかった。

ボクたちの間には何年も会っていないもの同士が再会した時の熱い感激も興奮もなく、やがて、ボクは声をかけたことを後悔しはじめた。

話のきっかけは憶えていない。木偶のように突っ立っていた須藤が唐突に、

「ほずみは釣りやるの？……」

と聞いた。

当時、無類の釣り好きだったボクは、

「ああ……」

と答えた。

須藤は小さな漁港の先にある突堤の方角を指差して、

「あそこの堤防の先で魚がよく釣れるんだよ、こんど、一緒に行こうよ、」  
と云った。

実際、釣り好きの人間にとって「釣れる」の一言は必殺の殺し文句だったから、その言葉に無条件に反応したボクは財布に残っていた名刺の中から一枚を抜き出し、裏に自宅の電話番号を書いて渡した。渡しながら、ふと、

“でも、こいつと釣りは似合わない”  
と思った。

その年のクリスマスだったか暮れか正月のころに電話があった。受話器を取ると須藤のどこか現実感の乏しい声が聞こえた。

これといった用事があったの電話ではないようだったから二言三言言葉を交わしただけで会話は途切れた。

ボクは受話器を置いたための適当な口実を探しはじめ、それを察知した須藤は、  
「最近釣りやつてるの？……」

と話を変えた。気のない風に、

「ああ……」

と答えると、

「このあいだの堤防の先でアジが釣れてるんだよ、こんど一緒に行こうよ、」  
と云った。

ボクは、あどこか浮世離れた感じの須藤と釣り人のイメージがまだ頭の中でつながらないまま、

「ああ、今度な……」

と答えて受話器を置いた。そして、

“得体の知れない電話だ”

とだけ思った。

父親の会社には20年ほどいた。入社して数年経つと古参の番頭や会社幹部との軋轢がひどくなり、やがて、経営権を譲りたがらない父親との確執が始まり、社内の派閥争いや陰険な足の引っ張り合いに翻弄されたボクは、結局、憔悴しきって会社を辞めた。

今思うとそれが人生で二度目の挫折だったように思う。ボクはまた生き方を変えた。

\*

海外生活で培った語学と父親の会社で身につけた貿易実務の経験を生かし、海外の先端技術やモノポリアイテムを国内に導入するビジネスモデルは時流に乗り、40歳ではじめた事業は1〜2年で軌道に乗った。

研究者としても成功した。個人事業を営む傍ら、専門分野として選んだ水環境化学の分

野では一応名を知られるようになり、独立から4〜5年経つと事業運営と研究と執筆と講演活動に忙殺されるようになった。

忙しさに比例して収入も増え、やがて、仕事よりも税金対策に頭を抱えるようになった。収入に伴って貯蓄も増え、貯蓄が増えるとそれ以上に収入が欲しくなり、今度はそれを失うことが怖くなった。

そんな頃だったと思う、海岸通りを走っていると向こう側の歩道に所在なく突っ立っている男がいた。左側に車を寄せて声をかけた。

須藤は突然の再会に驚いた風もなく近寄ってくると、

「ほずみ……」

と云った。

久しぶりに会った須藤は消え入りそうに薄かった。何をどう話したのかも憶えていない。それほど影が薄かった。

須藤は小さな漁港に先にある突堤の方角を指差して、

「あそこの堤防の先でイサキが釣れてるんだよ、こんど一緒に行こうよ、」

と云った。ボクは気のない声で、

「ああ、行こう……」

と云いながら、

“こいつは口ばかりだから”

と思い、

“ザコにかまっている暇はないんだ、今の仕事が一段落したらすぐにドイツに飛ばなければいけない。とにかく、年収2000万円を稼ぐのは大変なんだから……”

とも思った。そして、そう思うと、何か、自分が特別に価値のある人間に思えてきた。

\*

それから1〜2ヶ月経ったころ高校の同窓会があった。会場に須藤はいなかった。

“そういえばあいつは卒業してなかったな”

と思い、納得して忘れた。

同窓会は盛況だった。立食形式の会場をうろうろしていると榎田がいた。榎田は地元でスーパーマーケットを経営している勝ち組の一人だ。実際、羽振りが良く見えた。

ボクらは一通りの世間話を交わし、通り一遍の昔話が尽きると話の接ぎ穂を失なつて無口になった。

しばらくバイキングの皿をつついていた榎田は思い出したように顔を上げ、

「そういえば、須藤って憶えてるだろ、あいつ死んだらしいぜ、半年くらい前だよ」

と云い、たたみかけるように、

「何で死んだかわかるか？」

と云つた。

榎田は訝しげに首を横に振るボクに顔を寄せると、何か口に出してはいけない話題にでも触れるように声をひそめて、

「栄養失調だつてさ……」

と云いながらボクの顔を覗き込み、

「だけどさ、変じゃないか、今のこの時代に餓死だぜ……」

と云いながら、いかにも薄気味悪そうな表情でボクを見つめた。

一瞬、あの消え入るように陰の薄い男の姿が脳裏に浮かび、ふと、

“あいつとはつい最近会つたばかりだ”

と思つた。そして、あれがいつのことだったかを考えた。記憶が曖昧ではつきりと思ひ出せない。何か、会うはずのないときに会っている気がした。

結局、榎田との話はそれきりになり、ボクらは須藤の存在を忘れ、かれこれ30年ぶりの同窓会は大いに盛り上がった。

その後、最初の妻と別れた。些細な行き違いが別れる別れないの話になり、慰謝料や財産分与の話がこじれて調停になり、やがて、泥沼の裁判になり、結局、離婚の申し立てから離婚成立まで2年かかった。

離婚騒動を巡るゴタゴタと生活の変化で仕事量は激減し、そんなこんなで事務所も閉めた。すっかり嫌気のさしたボクは、結局、財産のほとんどを別れた妻に残して家を出た。

今思うとそれが人生で三度目の挫折だったように思う。ボクはまた生き方を変えた。

\*

騒動が終わると世界が変わって見えた。何かすっきりとした気分になり、あれほど執着していた家や金も、失つてみるとどうでもいいものに思え、そんなものだけのために大真

面目に争ったことがひどくばかばかしいことに思えた。

同じ県内の西の外れに住まいを移したボクは性懲りもなく二度目の結婚をし、ある大手企業の技術顧問として職を得た。蓄えも収入も減ったが暮らしに不自由はなかった。むしろ、金銭欲や名誉欲から解放されて研究者としての仕事に没頭できた。良い仕事をしているという実感もあった。そして何年かが経った。

ボクはいつの間にか老いを感じる歳になっていた。そして、そんな頃にあの夢を見た。後にも先にもあれ一度きりの夢だったが、一度見ただけで十分だった。それほどリアルで忘れられない夢だったのだ。

その日からあいつの哀しげな表情が脳裏から離れなくなり、そんな気分が何日も続いた。あいつの死にかたが死にかただただにどうにも気になり、ある日、おぼろげな記憶を頼りに車を走らせてあの親子が暮らしていた家を探した。

須藤の家を見つけるのは思いのほか簡単だった。薄汚れてペンキの剥げ落ちた須藤電気店の看板はそのままだったし、住居兼店舗があったと思しきあたりには埃まみれの軽トラックが放置されていた。

孤独死だったのだろう。持ち主が死んでもう何年も経つのに、寂れた商店街の並びにある店の残骸は誰が始末するわけでもなく朽ちるまま放置されていた。哀しい光景だった。須藤が無性に可哀そうになった。もし彷徨っているなら何とかしてやりたいとも思った。

知り合いの知り合いに霊能者がいる。人づてに霊視を頼んだら、  
“未浄化霊です”

とのことだった。霊能者はあの世に逝くよう説得したが、須藤は、

“ここは居心地が良いので、このままそっとしておいてほしい”

と云い張り、霊能者にボクへのことづてを託したという。

ことづては自分の墓の前に咲いている花をボクの家の中に植え替えてほしい、といった内容のものだった。

ボクはその意味を考えた。結局、よくわからないまま、

“ここは居心地がいいんだろうな”

とだけ思った。ただ、見えないものに居座られるというのはあまり気持ちのいいものではない。

憑依されたという感じはなかったが、この世に未練を残すものに頼られるというのは何処か持てあます感じがあった。迷わず成仏して欲しいという思いもあった。霊能者に相談

したところ、縁のある者が送るしかないということになり、結局、その霊能者の立ち会い  
で除霊をすることになった。

除霊はボクとその霊能者で行った。須藤はボクの傍にいた。霊能者は真摯な態度で未浄  
化霊に語りかけ、長い時間かけて説得した。やがて、須藤の霊が納得したのであとは当事  
者のボクが送るのが良いと云う。

ボクは霊能者の言葉に従って目を瞑り、その言葉に従って意識を集中した。何ものかが  
そこにいるのがわかった。やがて、時間の感覚が遠のき、そして、普段目で見るものとは  
違う何かが見えてきた。

その何かの手をとり、そして昇った。どちらの方角かわからない。三次元的に言うとな  
に昇る感覚かもしれない。あいつは意外なほど素直についてきた。そのまま上に昇った。  
とても早く高く昇った。

そろそろと思ったころ手を離れた。あいつはそのまま昇って行った。やがて、温かいも  
のが胸に広がるのがわかった。言葉が聞こえたように思った。

“さよなら……”

だったか、それとも、

“ありがとう……”

だったか、はつきりとしらない、伝わってきたのはそんな意味のことだった。

胸の奥に温かいものが流れ、満たされた想いが広がった。

“ああ、あいつ逝ったんだな”

と思った。

ふと、高校生だったころのあいつを思い出した。そして、須藤はずっとあの場所にいた  
のだということに気がついた。須藤の時間はあそこで止まっていたのだ。

あれから、須藤の夢は見えていない。